

畠山重忠



埼玉県立嵐山史跡の博物館

埼玉県立嵐山史跡の博物館が建つ国指定史跡「比企城館跡群 菅谷館跡」は、平安時代末期から鎌倉時代初期に活躍した豪族畠山重忠の館跡と伝えられています。畠山重忠は、現在の深谷市畠山の畠山館で生まれ、その後この菅谷の地に館を構えたといわれ

る、埼玉県ゆかりの人物です。源頼朝の右腕として手腕を発揮し、鎌倉幕府に仕えた重忠の活躍ぶりは、鎌倉幕府が編さんした歴史書『吾妻鏡』や、軍記物語『平家物語』などからうかがうことができ、逸話も全国に残されています。もっとも、重忠にまつわる伝承の中には明らかに史実と異なるものも見受けられます。800年以上前の人物であること、42歳で時の権力者である北条氏に滅ぼされて資料が散逸しまったこと、ゆかりのある遺跡の発掘調査からも重忠に直接結びつくような資料が見つかっていないことから、わからないところも多くあります。(埼玉県立嵐山史跡の博物館館長)

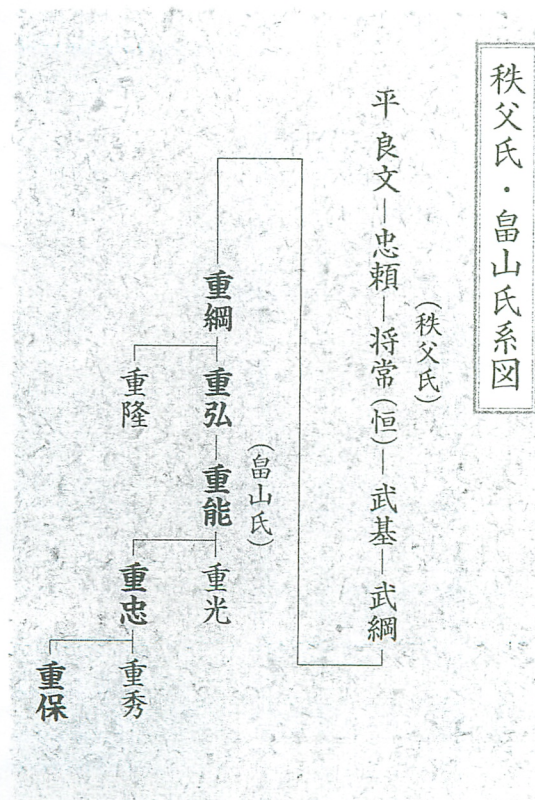
東京都駒込に住んでいた儒学者小柳通義(1870～1945)は、地元有志の協力を得て、昭和4年(1929)春、現存する重忠のコンクリート像(竹筋)を建立しました。平服で鎌倉の方角を臨む重忠の姿は菅谷小学校長宮崎貞吉(1878～1950)の提案、造形は美術学校出身の浅井正山、碑文の撰文と書は小柳通義が行いました。表紙下段写真の重忠像の右脇で笠をかぶっている人物が小柳です。この重忠像は、平成24年度に嵐山町指定有形文化財(美術工芸品)となりました。

畠山氏の系譜

～重忠誕生前夜～

畠山重忠は、長寛2年（1164）、武蔵国（埼玉県・東京都と神奈川県の一部）の豪族畠山重能の次男として誕生しました。母は相模国（神奈川県）の豪族三浦義明の娘（母を江戸重継の娘とする新説あり）です。父の重能は、男衾郡の中心である国衙領の畠山郷（現在の埼玉県深谷市畠山一帯）を本拠とし、重忠は重能の居館であった畠山館で生まれたといわれています。

畠山氏は桓武平氏の流れをひく秩父氏の一族です。秩父氏は、平安時代中期ころから秩父盆地を開墾した豪族で、代々、武蔵国の国衙（役所）の在庁官人（国司の命を受けて事務を担当する役人）を務め、武蔵国内で大きな勢力を誇っていました。そして、この時代の生活や軍事に欠かすことのできない馬を育て管理する牧も掌握していたことから、秩父一族はその実力を不動のものとししました。畠山氏は、秩父重綱の孫の重能が畠山郷を本拠とし、荘園の荘司となったことから、畠山庄司を称したことに始まったといわれています（略系図参照）。



一方、秩父重綱の子秩父重隆は、帯刀先生（皇太子警護役人の長）であった源義賢と組んで勢力拡張をはかりましたが、久寿2年（1155）、義賢の館があった大蔵（嵐山町）を舞台とした大蔵合戦で、源義朝と義平らの軍勢に敗れます。畠山重能は源義平に組みしていたといわれています。なお、このとき義賢の子駒王丸（後の源義仲）は、畠山重能の手引きにより木曾へ落ち延びました。武蔵国に大きな勢力を張っていた秩父重隆が倒れたことにより、武蔵国の武士団の多くは源義朝の配下に入りました。

この後、武蔵国の武士団は、大蔵合戦の翌年におきた保元の乱や平治元年（1159）の平治の乱において、源義朝のもとで戦いました。しかし平治の乱では、源義朝が平清盛に敗れ、武蔵国が清盛の知行国となったことにより、武蔵国は平氏の支配下におかれることになりました。重忠はこのような時代に誕生したのです。

（銘文）
敬白 勸進沙門実与
奉施入如法経御一口
右志者為自他法界平等利益也
久安四年 戊辰 二月廿九日 戊 当国大主散位
藤原守道 阿部末恒
藤原助貞



《県指定文化財 銅鐘（経筒）》＜平沢寺（嵐山町）蔵＞

経筒は、極楽往生などを願って、仏教の経典を土中に埋める経塚を造る際に造られた、教典を入れるための容器です。この久安4年（1148）銘を刻む経筒は、江戸時代に平沢寺の裏山から発見されました。銘文にある「平朝臣茲綱」は、重忠の曾祖父秩父重綱であるといわれています。このことから重綱の時代には、平沢寺のある嵐山町（都幾川以北）を含めた比企地域が、重綱の勢力圏であったことがうかがえます。

平氏方から 源氏方へ

仁安2年（1167）、重忠が3歳の時、平清盛が太政大臣に任じられ栄華を極めることとなります。重忠は、平氏の全盛期に平氏一族の子として成長したのでした。

ところが、治承4年（1180）8月17日、源義朝の子頼朝が平氏打倒を掲げて挙兵したため、各地の武士は再び平氏・源氏いずれに味方するのか判断を迫られました。『平家物語』によれば、この時、重忠の父重能は、平氏方の武将として京都の御所の警護役である京都大番役を務めるために上洛中で、畠山館の留守は重忠に任されていました。

秩父平氏の系譜をひき、平氏に仕えてきた畠山氏の当然の選択として、重忠は平氏に味方し、秩父一族で武蔵国留守所総検校職として武蔵国の武士団に指揮権をもつ河越氏らとともに、頼朝に味方した相模国の三浦氏の居城衣笠城（横須賀市）を8月26日攻撃し、落城させました。この時、重忠は17歳でした。なお、三浦氏は重忠の母の実家であり、この戦いで重忠の祖父にあたる三浦義明は河越重頼や江戸重長らに攻められ、自害に追い込まれました。

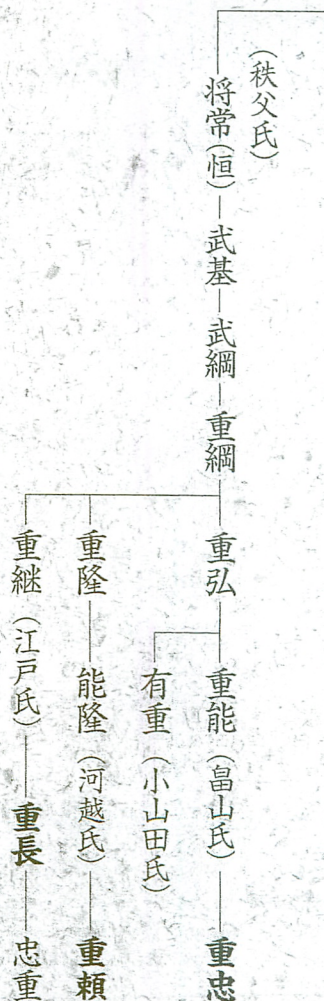
頼朝は、8月23・24日の相模国石橋山の合戦に敗れ、海路安房国（千葉県）に逃れましたが、相模国と安房・上総・下総国（千葉県）の武士団が頼朝に味方したため、治承4年10月には武蔵国に入るまでに勢力を回復します。頼朝は、武蔵国に勢力をもつ秩父一族の江戸重長に頼朝への帰属を勧告します。『吾妻鏡』によれば、同年10月4日、長井の渡しにおいて、秩父一族の江戸重長や河越重頼とともに、重忠は頼朝に従うことになります。『源平盛衰記』には、この時、頼朝と重忠の間で、重忠が源氏方に加わることになれば都にいる平氏方の父の重能や叔父の小山田有重と敵対する関係になること、頼朝に味方する三浦氏を討った理由、白旗は源氏の指す旗であるのになぜ平氏方の重忠が指しているのかなど、問答があったことが記されています。



《満昌寺にある伝三浦義明公墳墓〔宝篋印塔〕（横須賀市）》

《畠山氏・河越氏・江戸氏系図》

平良文—忠頼



源平の争乱

～治承・寿永の乱～

治承4年(1180)5月、後白河法皇の皇子以仁王による平氏討伐の令旨が諸国の武士に伝えられ、畿内に基盤を持つ源頼政が平氏打倒の兵をあげました。これに応じて、伊豆に流されていた源頼朝や信濃の木曾谷で暮らしていた源(通称木曾)義仲をはじめ各地の武士が挙兵し、5年にわたって争乱が続きました。この内乱を治承・寿永の乱といいます。

源頼朝は、治承4年(1180)10月6日、畠山重忠ら秩父一族を従え、父祖ゆかりの地、相模国(神奈川県)鎌倉に入りました。この時、重忠は、名誉ある軍勢の先陣をつとめました。重忠が先陣をつとめることになった理由はふたつ考えられます。ひとつは、二日前の長井の渡しにおける問答の結果からです。『源平盛衰記』によれば、重忠が白旗を指していたことを頼朝がとがめたとき、重忠は「白旗は先祖武綱が源義家からたまわったもので、この旗をかかげて先陣をつとめ、清原武衡らを攻め滅ぼした由緒ある旗であり、白旗を指すことは当家の吉例である。また、源氏のためには縁起のよい旗である」と答えて、頼朝を感激させたと記されています。このことから吉例をもとにして重忠を先陣にしたと思われます。もうひとつは、平氏方の武士が頼朝の傘下にはいったことを宣伝する意味があったと思われます。重忠が先陣を命ぜられたと聞いた多くの武蔵国・相模国の者たちが頼朝の軍勢に加わったといわれています。

こうして東国をまとめた頼朝は、いよいよ西国の平氏打倒に向けて動き出していくのです。

源平の興亡

源頼朝は、治承4年(1180)10月の富士川の戦いの後、東国の地盤固めに力を注ぎました。

一方、頼朝とほぼ同じ頃に信濃国(長野県)で挙兵した源義仲は、次第に勢力を拡大していきました。あわせて各地の源氏勢力も立ちあがったため、争乱は九州まで広がっていきました。

寿永2年(1183)、義仲は京から平氏を追い

出し、都入りを果たしました。京から追われた平氏は、安徳天皇とともに備前国(岡山県)へ落ちていきます。一方、頼朝は、朝廷から東国沙汰権(支配権)を公認され、名実ともに東国の主になりました。この年がこれ以後の平氏と源氏の運命を分けた年となったのです。

宇治川の戦い

入京した源義仲と対立した後白河法皇は、源頼朝に対し、義仲追討の命をだします。これを受けて頼朝は、弟の源範頼と源義経に大軍を与えて上洛させ、元暦元年(1184)正月に義仲を近江国(滋賀県)粟津で討ちました。

『平家物語』によれば、この戦さにあたり重忠は、義経軍の一員として500騎の軍勢を率いて参戦していました。夜明けに到着した宇治川は、雪解け水で水位が上昇し、皆が渡河を躊躇する状態でしたが、重忠は「瀬踏みしましょう」といって、馬で川に入ります。渡る途中で敵方に馬を射られ、仕方なく河床を歩いていると、馬を流された烏帽子子(元服の加冠の儀式にあたり、冠を授けた子)の大串重親がしがみついていたので、怪力の重忠は重親を敵陣のある対岸に投げてやりました。すると重親が、「徒行だちの一番乗りである」と叫んだので、皆の笑いを誘ったという話が記されています。

このあと重忠は、他の馬に乗り換えて義仲の家臣である長瀬重綱を討ち取り、味方の指揮を鼓舞したと伝えられています。



『畠山館跡(深谷市)にたつ鴨越の逸話をもとにした重忠像』

一の谷の戦い

源範頼・源義経軍が、源義仲追討に追われている間に、平氏は西国から旧都福原（兵庫県神戸市）へ戻った後、摂津国一の谷（神戸市）に陣を築いて、京都回復を目指しました。このため、範頼・義経軍は、義仲を討ち取ると、頼朝の命を受け、元暦元年（1184）2月、一の谷に陣を構えた平氏への攻撃にかかります。

一の谷の戦いといえば、「鶴越を重忠が愛馬三日月を背負って下りた」という逸話が大変有名です。鶴越は一の谷の裏山で、平氏の陣を真下に見下ろす断崖絶壁でした。義経以下、急な斜面を馬とともに降りることになかなか決心がつかなかったといわれるこの難所を、重忠は本当に馬を背負って下りたのでしょうか？

実は、この鶴越に向かったのは搦手の軍である義経軍2万騎のうち、たった70騎からなる別働隊でした。義経は鶴越に向かうにあたり、この別働隊を自ら率い、残りの本隊は甲斐源氏の安田義定らに預けたのです。つまり、重忠の先の逸話が成り立つためには、重忠がこの別働隊の一員でなければなりません。

では、各書物にはどのように書かれているのでしょうか。まず、『吾妻鏡』によれば、「重忠は大手の軍の大將源範頼に従った」としていることから、鶴越はもちろん、義経軍にもいなかったこととなります。『平家物語』には、搦手の大將源義経に従ったとありますが、鶴越の場面に重忠の名前はなく、馬を背負った話も記していません。実はこの話が登場するのは、『延慶本平家物語』や『源平盛衰記』だけで、重忠の所属についても「範頼を大將の器ではないと見限った重忠が、義経の軍に乗り換えた」と記されており、記述の信憑性が疑われます。

一方、『吾妻鏡』や『平家物語』などの諸本の多くには、「重忠の家臣・本田近常が平師盛（清盛の孫）を討ち取り、それが安田義定の手柄となった」という記事があります。このことから、重忠主従が属していたのは、鶴越に向かった別働隊ではなく、安田義定らが率いる搦手の本隊であった可能性が高いといえます。

このことから、今日では、重忠が鶴越で愛馬を背負って下りたという話は、重忠の怪力ぶりと心根の優しさを物語るために、後世に創作されたものと考えられるようになっています。



《源平合戦図屏風 右隻（一の谷の合戦）》<埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵>

屋島の戦いから壇ノ浦の戦いへ

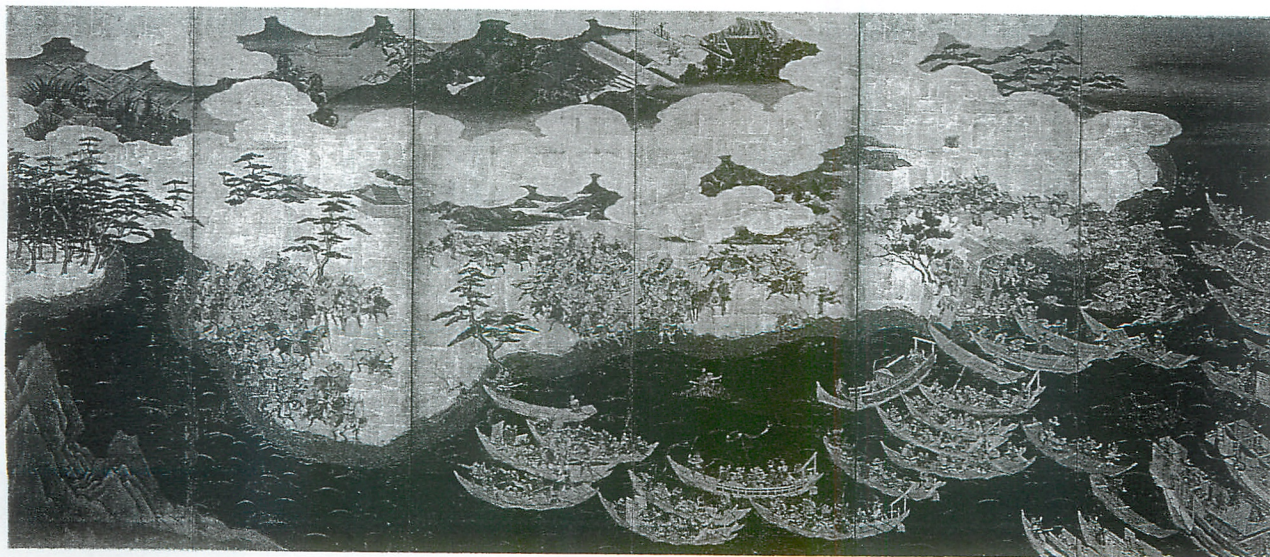
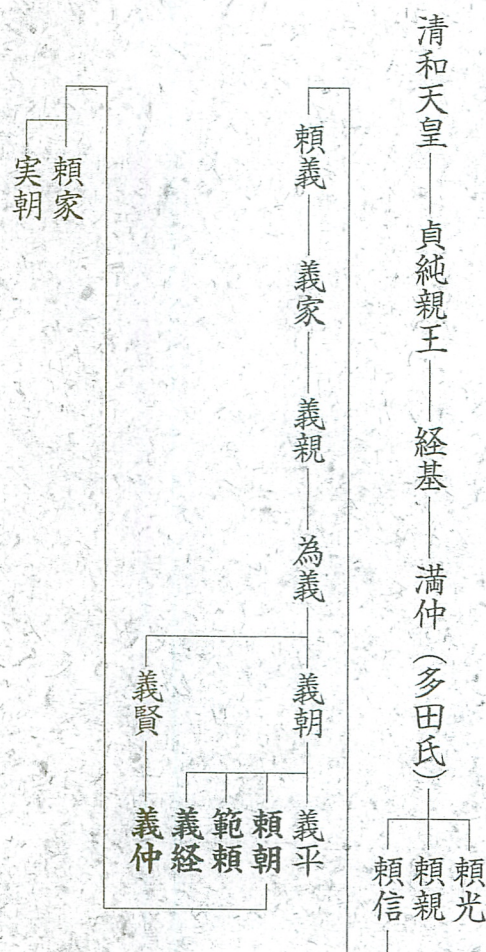
一の谷の闘いで敗れた平氏は、福原の都（神戸市）を追われ、瀬戸内海を渡って讃岐国の屋島（香川県高松市）に新しい拠点をおきました。頼朝は、中国地方から九州を押さえた後、この屋島を攻撃する作戦をとりました。重忠は、一の谷の合戦に引き続き、元暦元年（1184）9月、源範頼に従って西国へ進んでいます。

『平家物語』などで有名な那須与一による扇の的の逸話は、この屋島の戦いでの出来事です。『源平盛衰記』には、最初に平氏の扇の的を射るよう命じられたのは重忠であり、重忠は固辞し那須与一を推薦したと記されています。

文治元年（1185）2月19日、平氏軍は、義経軍によって屋島から追われ、豊後国（大分県）に渡っていた範頼軍と屋島の義経軍に包囲される形となり、3月24日、長門国（山口県）の壇ノ浦で滅亡しました。

同年11月に、頼朝は朝廷から守護・地頭の設置を認められたことから、東国を中心にした支配権が西国にもおよぶことになり、武家政権としての鎌倉幕府が事実上成立しました。重忠も幕府の御家人として活躍していくことになります。

《清和源氏系図》



《源平合戦図屏風 左隻（屋島の合戦）》＜埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵＞

鎌倉幕府に おける活躍

奥州合戦

平氏が滅びると、源頼朝は、戦いに尽力した弟の範頼と義経を鎌倉へ呼び戻しますが、後白河法皇に眼をかけられた義経が頼朝に承諾を得ないまま官位をもらったことをきっかけに、義経を遠ざけるようになります。頼朝に憎まれた義経は京を追われて、鎌倉に入ることも拒否されたため、奥州藤原氏を頼って、平泉（岩手県）に身を寄せました。

文治5年（1189）、藤原泰衡は父の秀衡がかくまっていた義経を自害させ、頼朝のもとにとどけましたが、頼朝は義経をかくまったことを許さず、藤原氏を討つため奥州に出陣しました。このとき重忠は軍勢の先頭にたつ先陣という名誉な役割をつとめています。そして、平泉に向かう途上、藤原氏が防御のために阿津賀志山（福島県伊達郡国見町）に築いた堀を、重忠は工夫を使って埋めてしまうなど大きな働きをしました。

阿津賀志山の合戦における勝利の後、頼朝が重忠にあてた文書で、制圧地において軍勢が乱暴な行為をしないように監督することを命じています。文頭に頼朝の花押（サイン）があります。資料名にある平盛時は、頼朝が出す文書の代筆を仕事としていた頼朝の側近で、この文書をしたためた人物であり、月日の下に名前があります。重忠にあてた文書ですが、重忠は「庄司次郎」と記されています。

幕府における業績

頼朝は、建久3年（1192）7月、征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉幕府が名実ともに成立しました。

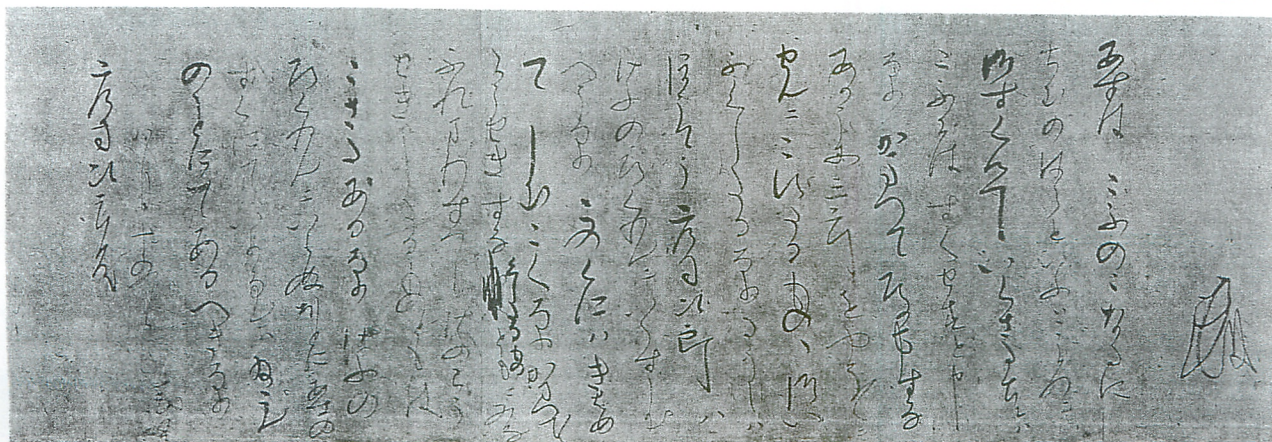
重忠は、幕府の公式行事への列席や頼朝の神社参詣への随行などのほか、建久4年には武蔵武士の丹党と児玉党のいさかいの調停をするなど、幕府御家人としての実績を積み重ねていきました。重忠は、頼朝が富士野の狩に出かけた際にも随行し、東大寺大仏殿再建供養のために上洛した際には先陣をつとめています。このように、頼朝が重忠に大きな信頼を寄せていたことがうかがわれます。

重忠は、国元の菅谷館のほか、鎌倉にも邸宅を設け、幕府の公務をおこなう際などにはここを拠点としていました。

邸宅のあった場所については諸説ありますが、現在「畠山重忠邸址」の石碑が建てられている場所は『新編相模風土記稿』の説をとっています。



《畠山重忠邸跡の石碑（鎌倉市）》



《源頼朝袖判平盛時奉書（複製）》＜当館蔵・原資料は東京大学史料編纂所蔵＞



《源氏の守護神として崇拝された
鶴岡八幡宮（鎌倉市）》

音曲の才能

数々の活躍の中には、重忠の音楽の才能を垣間見ることができます。

当時、京で有名な白拍子であった静御前は、頼朝の弟義経の恋人となっていました。義経が頼朝と不仲になり、頼朝から追われるようになると、静御前は捕えられて鎌倉に連行されました。そして、静御前は頼朝から命じられ、文治2年(1186)4月7日に鶴岡八幡宮で舞を披露しました。舞の伴奏は、幕府の御家人のなかで楽器を演奏することができる者がつとめました。重忠は、伴奏者のひとりとして、銅拍子という楽器を演奏しました。銅拍子は、本来仏教の儀式につかう楽器で、小さなシンバルのような形をしており、両手に持って打ち鳴らすものです。なお、鼓は京での生活が長かった工藤祐経が打ったといわれています。この工藤祐経は、のちに富士野の狩の際に曾我兄弟の仇討ちと知られる事件で、敵として討たれてしまった人物です。

また、当時は今様という歌謡が流行していましたが、重忠はこれもまた見事に歌うことができたようです。元暦元年(1184)11月6日、鶴岡八幡宮で神楽が催されたとき、頼朝は八幡宮の別当主催の宴会に招かれました。宴席には、今様を得意とする稚児が京から呼び寄せら

れていました。そしてこの席で、重忠も今様を披露しているのです。重忠は今様に相当の自信をもっていたのでしょう。

こうした風流な技を、重忠はどこで身につけたのでしょうか？重忠たち御家人には、京都御所の警護をする京都大番役という役目が、当番制で義務づけられていました。当番のときは、約半年から3ヶ月ほど京に滞在することになり、京の一流の文化に触れることが可能であったと思われます。おそらく重忠はそうした機会を利用して、修養を積んだものと思われます。頼朝は、武術だけでなく、こうした才能をもった人物を重用しました。重忠が頼朝に重用された理由にはこうした面もあったからでしょう。



《銅拍子の復元品》＜当館蔵＞

重忠伝説

奥州を平定し、鎌倉に戻った頼朝は、平泉で目にした中尊寺の二階堂大長寿院をまねて、建久3年(1192)、鎌倉に永福寺(現在は廃寺。二階堂ともいわれ現在でも地名としてのこる)を建立しました。その工事の際、怪力で知られた重忠は、庭石となる大石をひとりで運び、周囲の人々を驚かせたと『吾妻鏡』に記されています。このほかにも『古今著聞集』には、頼朝の御前で相撲が催された際、関東一の力士長居と取り組みをした重忠は、長居の肩の骨を砕いてしまったという話が残されています。

また、深谷市畠山には、重忠が荒川の対岸の

村と争った際に投げたと伝える大石が残されています。逸話をそのまま信じることはできないまでも、重忠は相当の怪力の持ち主であったといえるでしょう。このような怪力伝説をうけて、かつては男子が産まれると、その子の健康・栄達を願い、力石をかかえた重忠を描く絵馬が奉納されていました。

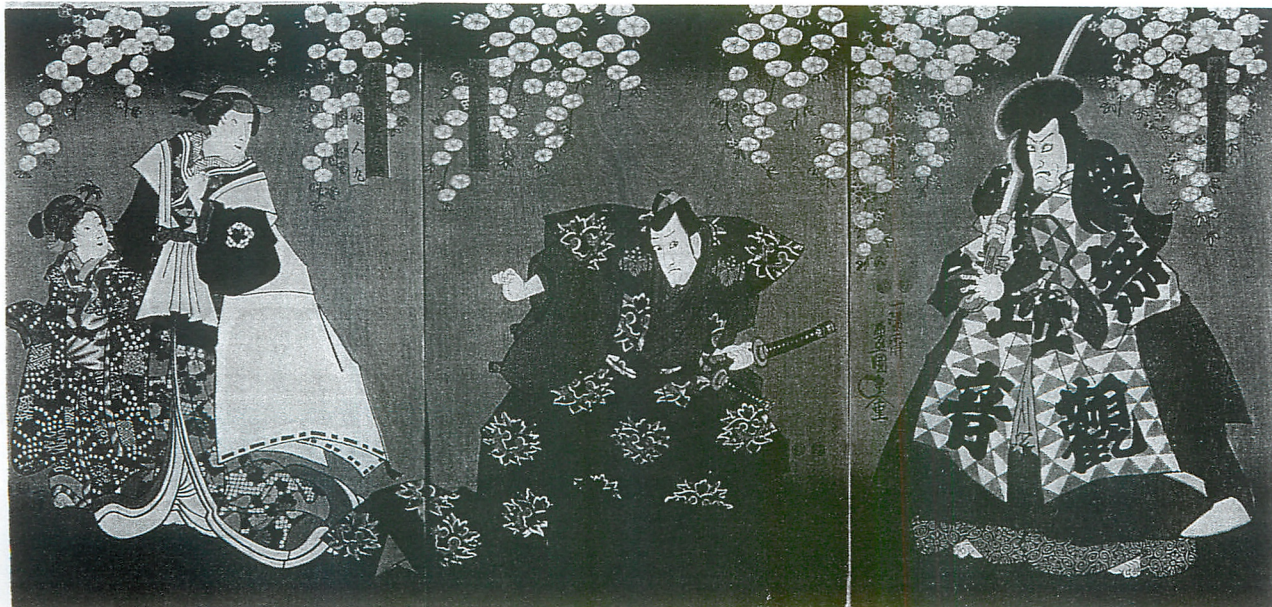
文芸作品のなかの重忠は、情理に通じ、高い教養を備えた理想の人物として描かれています。『曾我物語』では温厚で将来を案じる賢人として、文楽や歌舞伎の『壇浦兜軍記』や『出世景清』などでは情に厚い名脇役として登場します。



《永福寺跡の重忠石と伝わる大石
(鎌倉市) 高さ約128cm》



《絵馬「重忠力石持」(複製)》<当館蔵・原資料は江戸東京たてもの園蔵>



《江戸時代の錦絵(芝居絵)「壇浦兜軍記」》<当館蔵> 右から、景清、畠山重忠、阿古屋と娘の人丸

重忠の 苦悩

沼田御厨をめぐる騒動

文治3年(1187)9月27日、重忠は囚人として千葉胤正に預けられました。これは、重忠が地頭をつとめていた伊勢国(三重県)の沼田御厨という領地のことで裁判が起こり、その責任を問われたためでした。鎌倉時代には、伊勢神宮の神領である御厨という土地があり、その中のひとつである沼田御厨は、重忠が管理を任されていました。このため重忠は、代官(代わりの人物)を派遣して御厨を管理させました。その代官が強引にある人物の財産を没収したとする訴えがなされたのです。責任者として幕府に呼び出された重忠は、「代官がしたことで、自分は知らなかった。申し訳ない」と謝罪しましたが、囚人扱いとなりました。

重忠は、預けられた千葉胤正の屋敷で、食事をとらず、眠らず、口もきかず謹慎し、反省の意志を示すとともに、絶食して死ぬつもりのようなでした。この様子を聞いた、頼朝はその態度に感心し、すぐに許したといわれています。

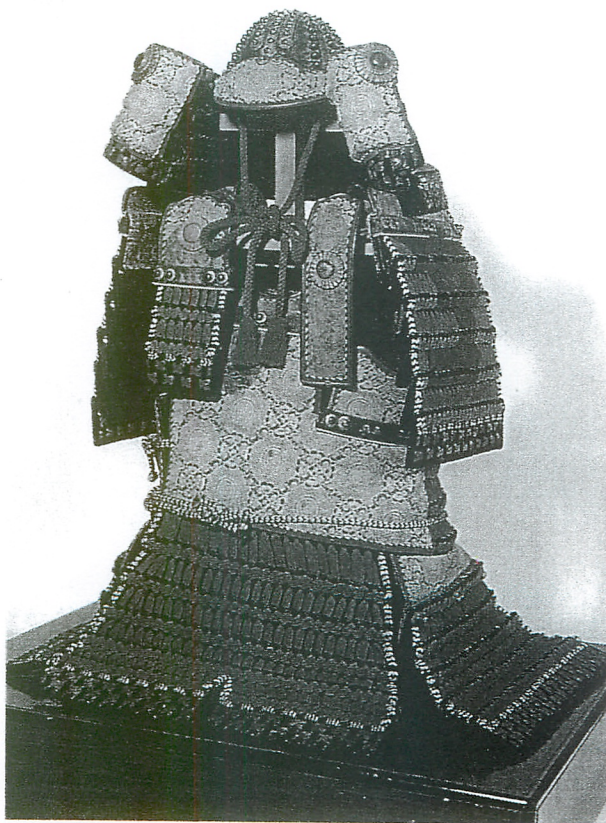
このあと、梶原景時が頼朝に、「囚人扱いされたことを恨んだ重忠が謀反を企てている」と讒言したため、文治3年11月15日に頼朝は、小山朝光・和田義盛らを招集して重忠の処置を問いました。合議の結果、下河辺行平を使者として謀反の企てが事実であるのか確認させることになります。行平は17日に菅谷の館に赴き、鎌倉の様子を伝え、重忠は大いに憤慨しました。「多年の御恩があるのになぜ反逆しなければならないのか。讒言するものの口車に乗せられてだまし討ちにあうよりも、身の潔白を示すために自殺する」というのです。しかし、行平の説得により、同月21日、重忠は釈明のため行平とともに鎌倉へ向かい景時に申し開きをしました。この時、景時は、謀反の意志がないのであれば、それを誓うために起請文を提出するよう求めました。これに対して重忠は、「自分は考えていることと発言内容とを違える者では

ない。偽りをいわないことは頼朝公がよくご存じである。このことを頼朝公に披露していただきたい」と述べ、起請文を出すことを拒みしました。

景時が頼朝に取り次ぐと、頼朝は何もいわず、重忠と行平を呼び出しましたが、謀反のことについて問いただすことはありませんでした。このように重忠は窮地に追い込まれましたが、正々堂々と無実を訴え、事なきを得たのでした。

この一件は、単なる景時の重忠に対する誹謗中傷としてとらえることが出来ます。しかし、鎌倉幕府の創設前後の時期には、このような家臣内における権力争いが活発でした。

源義経に娘を嫁がせていた河越重頼は、文治元年(1185)、義経に連座するかたちで所領を没収のうえ誅殺され、北条時政と対立した比企氏は、建仁3年(1203)、一族が討伐されるなど多くの武将がこの時期に殺されています。



《重忠が奉納したといわれる国宝・赤糸威大鎧》＜青梅市・武蔵御嶽神社蔵＞

『明月記』によれば、元久元年（1204）、重忠が北条時政を討ったといううわさが京都の公家たちの間でひろまりました。これは誤報でしたが、この出来事は、鎌倉の幕府政治を心よく思っていなかった京都の公家たちの思いが表れたものととらえることができます。

元久2年（1205）の鎌倉は、4月から不穏な空気が流れていたと『吾妻鏡』は記しています。6月20日に、重忠の息子の重保は、稲毛重成に招かれ鎌倉に入りました。そして事件が起きたのは、6月22日のことでした。鎌倉で騒ぎがあり、何事かと由比ヶ浜に様子を見に行った重保が、三浦義村の指揮により殺害されてしまったのです。

一方、『吾妻鏡』によれば、重忠は、6月19日に菅谷館を出て鎌倉に向かっていました。ところが、同月22日、二俣川（横浜市旭区）まで来ていた重忠のもとに、重保が討たれ、さらには自分を討つために、北条氏の軍勢が鎌倉からこちらに向かっていくことが知らされたのでした。大手の大將軍は北条義時、先陣は葛西清重、秩父平氏の系譜を引く河越重時・河越重員・江戸忠重らを含む大軍勢でした。これに対し重忠勢は、重忠の次男重秀、家臣の本田近常や榛沢成清らわずか130騎程度で、勝ち目はあ

りませんでした。菅谷館に引き返すこともせず、二俣川で幕府の軍勢を待ち受け、4時間にも及ぶ激闘をなしく、重忠主従は討死しました。重忠は、愛甲季隆の射た矢があたり、首級をとられたといわれています。また、畠山重秀と家臣は自害したと記録されています。

なぜこのようなことになったのでしょうか。『吾妻鏡』の記事からうかがってみましょう。

畠山重保は、3代將軍実朝の御台所（正室）を迎えるため上洛した際、元久元年11月、北条時政の後妻牧の方の娘婿の平賀朝雅と口論になりました。このことを朝雅は、牧の方に訴え、牧の方は北条時政を動かし重忠・重保親子の殺害を計画させます。当時幕府の実権は、時政ではなく息子の義時に移っていたため、時政は、まず義時に相談を持ちかけました。はじめは反対していた義時も結局は討伐に賛同し、重忠親子を討ちました。ところが、戦さが終わってみると、二俣川で出会った重忠の軍勢があまりに少人数で、とても謀反を企てていたとは考えられなかったとして、重忠の死後、義時は討伐を計画した北条時政と牧の方らを幕府から失脚させました。そして、一度は没収した所領を後に重忠の未亡人に安堵しています。

『吾妻鏡』の記述では、重保と朝雅の口論の



《由比ヶ浜（鎌倉市）近くにたつ
伝畠山重保供養塔（宝篋印塔）》



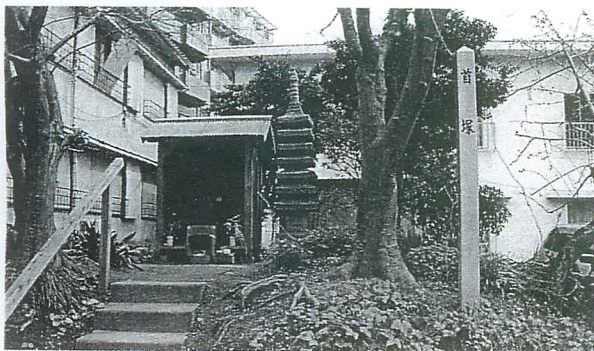
《重忠が討たれた二俣川の古戦場跡（横浜市）》

原因は明らかではなく、また口論だけが討伐の理由とは思えません。このとき時政は、源氏の血を受け継ぐ平賀朝雅を将軍にたて、自分が後見になることによって、義時に移ってしまった権力を取り戻そうとしたといわれています。一方の義時は、亡き頼朝の正室である姉政子とともに、北条氏中心の政治を確立しようとしていました。いずれにしても、時政や義時にとって、幕府草創の原動力となった武蔵武士の発祥の地である武蔵国を掌握するにあたり、武蔵国に古くから勢力をもつ畠山氏の存在は、脅威であり邪魔であったと思われます。この時までには、河越氏や比企氏は討たれており、武蔵国における有力者は畠山氏だけになっていました。

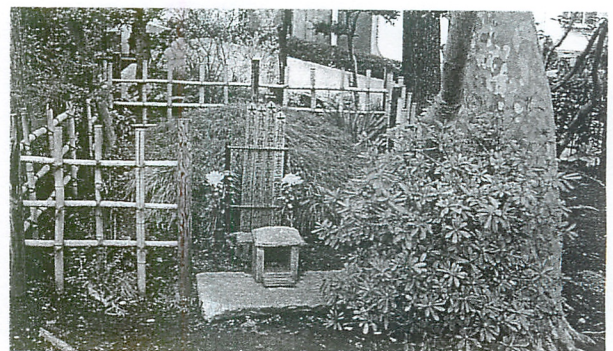
時政も義時も、畠山氏を討つことについては利害が一致しており、そのきっかけを探してい

たことでしょう。そこに平賀朝雅と畠山重保の間にもめごとが起きたので、これを利用したのだと考えられるのです。そのうえで義時は、重忠らを討ったあと、「重忠に無実の罪を着せた」との理由により、時政や朝雅を失脚させることに成功し、権力を不動のものとししました。これが事実とすれば、『吾妻鏡』が記すような義時は無実の罪で討たれた重忠への哀れみから時政を失脚させたのではなく、すべて当初からの計画だったと考えることもできます。

重忠が討たれた二俣川周辺には、重忠の首塚、家臣を葬ったという六ッ塚、北条氏の軍勢が集まったという万騎が原など、合戦にまつわる史跡が今に伝えられています。



《重忠の首を納めたといわれる首塚（横浜市）》



《重忠の家臣を葬ったといわれる六ッ塚（横浜市）》



《二俣川古戦場跡にたつ畠山重忠公碑（横浜市）》



《軍勢があふれたところからついたといわれる万騎が原（横浜市）》

重忠のふるさと

誕生の地 ～深谷市～

埼玉県深谷市畠山は、重忠の父・重能が館を構え、畠山性を名乗った、畠山氏発祥の地です。重忠は、この畠山荘で誕生したと伝えられています。



《畠山館跡》



《畠山重忠および家臣の墓といわれる五輪塔》

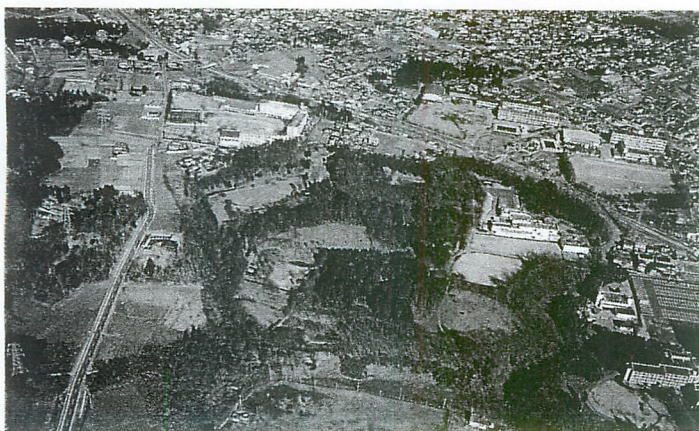


《重忠が再興したといわれる満福寺》



《秩父からこの地に移った際、秩父の井原神社を勧請して建立された井原神社》

館を構えた地 ～嵐山町～



現在の菅谷館跡は、重忠が居住していた鎌倉時代の館跡を改修・拡張して造られた戦国時代の城跡です。菅谷館は誰がいつ築いたものか明らかではありません。また、重忠時代の館が館跡内のどの場所にあったのかは、全面発掘調査を行っていないことからわかっていません。

『吾妻鏡』によれば、重忠は文治3年（1187）11月までには菅谷館で暮らしており、元久2年（1205）6月の出陣もこの館からでした。

《菅谷館跡》

畠山重忠関係略年表

年 (西暦)	月.日	できごと
長寛2年 (1164)		重忠、武蔵国男衾郡畠山館 (現深谷市畠山) に生まれる。 父は畠山重能、母は三浦義明の娘。幼名を氏王丸という。
治承4年 (1180)	7.	畠山重能、小山田有重の兄弟、京都大番役のため上洛。
	8.17	源頼朝、伊豆で挙兵。
	8.24	重忠、平氏方として鎌倉由比ヶ浜で三浦義澄と合戦。
	8.26	重忠、河越重頼、江戸重長らと三浦氏の居城衣笠城を攻め落とす。三浦義明自刃。
	10.4	重忠、長井の渡りで河越重頼、江戸重長らとともに、頼朝と参会し、従う。
	10.6	頼朝、平氏討伐のため鎌倉に向け発つ。重忠先陣をつとめる。
寿永2年 (1183)	7.	畠山重能・小山田有重ら平宗盛より暇をうける。
元暦元年 (1184)	1.20	宇治川の戦いで、重忠、丹党以下500騎で川を渡る。 重忠、六条河原で源義仲と戦う。 源義仲、近江国栗津 (現滋賀県大津市) で討死。
	2.5	重忠、一の谷の合戦で活躍。
	11.6	鶴岡八幡宮別当坊で音曲あり、重忠は今様を歌う。
文治元年 (1185)	3.24	平氏、壇ノ浦にて滅亡する。
2年 (1186)	4.7	静御前、鶴岡八幡宮で舞を舞う。重忠、銅拍子で伴奏する。
3年 (1187)	6.29	伊勢国沼田御厨の代官が濫防。地頭である重忠が訴えられる。
	9.27	沼田御厨を没収され、重忠、囚人として千葉胤正に預けられる。
	10.4	千葉胤正の仲介により許され、重忠、武蔵国に帰る。
	11.15	梶原景時、重忠に謀反の意ありと頼朝に讒言する。
	11.21	下河原行平、重忠を伴い鎌倉へ帰る。重忠、起請文を書くようにいわれるも拒否。
4年 (1188)	4.9	源義経追捕の院宣がでる。
5年 (1189)	閏4.30	源義経、奥州衣川館で自害。奥州合戦始まる。
	8.10	重忠、阿津賀志山 (現福島県伊達郡国見町) の合戦で藤原国衡を討ち取る。
	9.20	重忠、勲功の賞として陸奥国葛岡郡 (現宮城県大崎市) を与えられる。
建久元年 (1190)	10.2	頼朝、上洛。重忠、上洛の先陣を命じられる。
3年 (1192)	9.11	重忠、永福寺庭池の大石をひとりで運び据える。
	7.12	頼朝、征夷大將軍に任じられる。
4年 (1193)	2.9	重忠、頼朝から丹党と児玉党の諍いの仲裁を命じられる。
	5.8	重忠ら、頼朝に従って富士野の狩に赴く。
	5.29	曾我兄弟の尋問が行われる。重忠、尋問の座に列席する。
6年 (1195)	2.14	頼朝、東大寺供養のため上洛。重忠、先陣をつとめる。
	4.5	重忠、梶尾 (現京都府京都市) で明恵上人に会い、教を乞う。
正治元年 (1199)	1.13	頼朝、死去 (53歳)。重忠、嫡子頼家のことを託される。
	10.28	重忠、梶原景時の糾弾連署状に書名する。
	12.18	景時、鎌倉を追放される。翌年1月20日梶原一族討たれる。
建仁3年 (1203)	9.2	比企一族討たれる。重忠、比企氏討伐軍に連なる。
元久元年 (1204)	1.28	京都で重忠が執権北条時政を討ったとのうわさがひろまる。
	10.14	重忠の子・六郎重保、三代將軍実朝の御台所を迎えるため上洛する。
	11.4	重保、京都守護の平賀朝雅と口論する。
元久2年 (1205)	1.14	重忠・重保父子の勘当が解ける。
	6.19	重忠、武蔵国菅谷館を出発し鎌倉へ向かう。
	6.22	重保、三浦義村に由比ヶ浜で討たれる。重忠、二俣川で北条義時・北条時房率いる大軍に襲われ、重忠以下134名討死。
	6.23	義時ら鎌倉に帰る。重忠の無実の死を悲しむ。
	閏7.19	時政・牧の方が追放される。22日、北条義時、執権となる。
承元4年 (1210)	5.14	重忠の未亡人 (北条時政の娘)、所領を安堵される。